

島崎藤村は、1936年に南米アルゼンチンのブエノスアイレスで開催された第14回国際ペン・クラブに、初参加の日本代表として出席している。4年後の1940年には東京でオリンピック、万国博覧会が予定されていた。これにあわせて国際ペン・クラブ大会をも東京に招致するのが、表向きの任務だった。ついで藤村はブラジルにも立ち寄り、日本人移民の多いサンパウロ市では、かねてからの求めに応じ、萬葉歌碑の揮毫を現地に託している。皇室の下賜金も得た日本病院が38年に完成したのを記念して、その入り口脇の庭に、黒い御影石の歌碑が建立された。現在、サンタ・クルス病院と改名されているが、鉄筋5階の当時の建物は、築70年とは思えぬ清潔な姿で、現在も大切に現役で使われている。

1931年の満洲事変に続き、日本は33年には国際連盟を脱退し、すでに孤立への道を歩み始めていた。1940年の皇紀2600年記念式典は、オリンピックも万国博も中止となり、国際ペンクラブ招致も、実現することはなかった。サンパウロの萬葉の歌碑も、1938年6月という時期を逸していたならば、建立は著しく困難になっていたであろう。実際、37年11月1日には大統領ゼツリオ・ヴァルガスがクーデタにより独裁政権を敷き、新体制esta novoを導入する。38年8月には新移民制限法が施行され、ついで外国人団体取締法、外国語学校閉鎖令などが発令される。14歳以下の移民への外国語教育が禁じられたことは、日本移民社会にも大きな打撃を与え、39年には帰国者数が入国者数を上回る状況に転じる。41年8月には外国語新聞の発行が停止され、38年に生まれた短歌誌『椰子樹』も、41年10月

連載 96
移民へのまなざし
サンパウロの藤村揮毫萬葉歌碑を訪ねて

も
ひ
押
り
に
よ
り
曲

の11号をもって廃刊に追い込まれる。

帰国後の藤村は、移民子弟の教育を配慮して日本語による児童文学全集などの普及を訴えた。だがこれは、ブラジルの現政権に対する内政干渉とも見なされかねない、困難な国際的状況を迎えていた。

戦前の南米移民は、日米開戦にともなうブラジルとの国交断絶により、終止符を打たれる。だが南米移民減少の背景には、33年以降の、日本政府の満州移民奨励策への変針があった。満州農業開拓移民を必要とした軍部からは、ブラジル移民派遣を妨げようとする動きもあったという。

そうした時代のうねりのなか、大阪商船の貨客船リオデジャネイロ丸に乗り込んだ藤村は、800名にのぼる同船の移民を眼にする。船中で病死した小児の水葬に立ち会った詩人の脳裏には、芭蕉の「旅に病んで夢は故郷を駆けめぐる」が去来したことだろう。

藤村は1901年作詩の「椰子の実」が、大中寅二作詞、東海林太郎歌唱により国民歌謡として空前の成功を収めるのも、1936年。南米移民の現実にあつた文豪は、移民の「流離の憂い」を、改めて「名も知らぬ遠き島より」流れ来たひとつの椰子の実に託そうとしたのだろう。そこには、ポルトガル語のsaudadeの悲哀も投影されていたに違いない。国策に翻弄される民衆への詩人の共感は、いかに再評価されるべきなのか。

サンタ・クルス病院と道路を隔てた「モダニスモ芸術家の家」を挟んだ対角線には、リトアニア生まれの流浪の画家、ラザール・セーガルの美術館がある。その壁を覆う、畢生の大作《移民船》(1939-41)は、藤村の萬葉歌碑と、今も密かに会話を交している。

国際日本文化研究センター研究員・
総合研究大学院大学教授
稲賀繁美